

さようなら大連

手塚 邦子

上鷲宮五丁目

私は中野に住んで三四年になりますが、アカシヤの花が咲く頃が来ると大連を思い出します。私は満州（中国東北）の大連で生れ育ちました。私の家の周辺はモダンな家が建ち並び、道路は広く碁盤の目のように整然として、ゆったりとした歩道にはアカシヤの並木がありました。そして、その白い花の咲く五月頃には、甘い香りがあたり一面にただよって、何ともいえない雰囲気をかもし出していました。そのような街で育ち、琴、

洋舞、日舞を習いながら恵まれた少女時代を過ごしていた私にとって、内地（日本）とは遙か遠い国でしかありませんでした。

ある日、易好きだった父が、易者を家に連れてきて占ってもらった時、「あなたは、内地へお嫁に行きますよ」と言われましたが、その時は、あのような大変動があつて内地へ来ようとは夢にも思わず、平和でのどかな生活を続けていました。

しかし、太平洋戦争が始まり、私が女学校二年生になった頃から、時々米軍機のB29が二、三機、はるか上空を悠々と飛んで行くことがありましたが、爆弾を落とすこともなく、そう怖

いとも思いませんでした。それでも庭に防空壕を造り、幾日もその中で生活できるよう備えました。そのうちに戦局は段々と厳しくなり、私達も木銃を担ぎ、ズボンに脚絆を巻いて学校に通いました。学校では勉強の外に、軍服の仕上げ作業に従事し、また、幾つかのグループに分かれ看護や通信などの専門教育を受けていました。

二〇年八月八日、突然ソ連軍が満州に侵攻し、事態は急変しました。ソ連軍の海からの上陸に備えて戦車壕を掘る為、大連中の男女中学生が動員されました。兵隊さんの指導監視のもと、風光明媚な星ヶ浦の海岸で、毎日朝から夕方まで汗にまみれ土にまみれて無我夢中で働きました。私達にもことの重大さがひしひしと感じられたのです。在郷軍人騎兵少尉だった四五歳の父も召集されました。

八月十五日、朝のラジオは天皇陛下の玉音放送が正午にあると繰り返し言います。何事かと不安な気持ちを抱きながらも、いつものように一生懸命働いていました。正午に近い頃、全員

近くの小学校に集まるように命令され、校庭で玉音放送を聴きました。「ガー、ガー」と雑音が入り、その内容は分かりませんでした。しかし、そのあと先生から日本が降伏したと知らされました。私たちは全身の力が一瞬のうちに抜けたような虚脱感を覚え、皆放心状態になってしまいました。

幸い父が直ぐ家に戻って来ましたので、不安の中にも家族全員揃うことが出来て心丈夫でした。やがて、少し奥地に住んでいた遠縁の若夫婦が、リュックサック一つで逃げて来て私の家に辿りつき、一緒に生活することになりました。私達は固く門を閉じカーテンを引き、息を潜めて不安な日々を送っていました。幸いなことに大連は早く治安も良くなり、生活も落ち着きを取り戻してきました。それでも初めて外に出た時は、母の後ろに隠れるようにして歩きました。近くの大連運動場には俄か市場が出来ていて、人、人、人で大混雑していて、仰天してしまいました。

私を通った小学校はソ連軍の司令部となり、近辺の住宅地はソ連将校と一時同居することになりました。私の家の二階にも、二人の将校が配属されて来ました。レニアル・ペーチャ、ニコライ・コリーヤという人でしたが、大変気持ちの優しい人達で、父母のことをパパ、ママと呼び、弟達も可愛がってくれました。よく魚や野菜を抱えて帰り「皆で食べて下さい」と母に渡していました。母が時々料理を作って上げると、大きなゼスチャー

で喜んでくれました。司令部が移って別れる時は、母の手を握り涙を浮かべていました。国と国とは憎しみ合い殺し合っても、個人個人は良い人だったと思います。

一時閉鎖されていた学校も、二つの学校が一つに統合され、午前と午後の二部に分かれて再開されました。アカシヤの並木道を友達と語り合いながら学校に通い、勉強に専念できる幸せ、平和の有り難さを感じました。しかし、兄が通っていた旅順高等学校は閉鎖され、兄は私達一家の生活を支える為に、友人とデパートのケースを借りて、ソ連将校相手に高級品の委託販売を始めました。私の家でも、お金になる品物は次々と持ち出され生活費に変わりました。

終戦から一年たった頃から、そろそろ引揚げが始まり、その年の十二月に私達は女学校生活とも別れ、それぞれの地区から内地へ帰ることになりました。回りの人達の引揚げがどんどん進み、隣近所が次々と空家になっていく中で、私の家には何の通知も来ず、不安と焦躁で母はおろおろしていました。戦時中指導的立場だった家の者は、最後まで残っていたのです。いよいよ私達の地区は終りという頃になって、やっと大連港へ集結するようにとの知らせが来ました。その時の家中の喜びはたとえようありませんでした。しかし、写真を全部アルバムから剝がし、私のお雛様は風呂の竈の中で燃やしました。きれいな人形が炎に包まれた時は、何ともいえない悲しみで一杯でし

た。琴も灰になりました。

終戦から一年半たった二二年の二月末、凍りつくような厳寒の日に、私達一家も大連埠頭の岸壁に立つことが出来ました。様々な想い出が走馬灯のように脳裡に浮かび、二度と戻らぬ大連に向かって「さようなら」と最後の別れを告げました。「寒いよオ、寒いよオ」と傍らの幼い弟の泣き叫ぶ声、それは私の心の中の慟哭なげなきでもありました。「あなたは内地へお嫁に行きますよ」と言った易者の言葉がふと頭をよぎりました。

何日かの航海が終わり、船は無事佐世保に入港しました。その入江の島々が見えた時には、誰ともなく歓声が湧き起こりました。緑の多い美しい景色に、今までの辛さが忘れられる程でした。そして、この先にどんな試練があっても、この日本の地なら何とでも頑張れると思えました。物質面ではすべてを失いましたが、私達一家七人は一人も欠けることなく揃って帰ることが出来たのです。

あれから四十数年の長い歳月がたちましたが、アカシヤの花の咲く頃が来ると、私は大連を思い出します。

そして、孫もいる今になっても、あの当時の父母はどんな思いであつたらうかと、その時の心境を思うと、私の胸は痛みます。

